

日本へ留学の意義 — 国境を越えた近代教育実践者の 黄瀛母子 —

王 敏(著)¹⁾、鈴木 晶 (訳注)

一. 黄瀛母子のこと

宮沢賢治がまだ無名の頃、黄瀛は彼の才能に惹かれて宮沢賢治に会うため、わざわざ岩手県の花巻を訪れた。宮沢賢治にとって黄瀛は生前、唯一知り合った中国人の文人である。その黄瀛は、生きる歴史辞書とも呼ばれた人物で、魯迅とも数回面会したことがあり、文学について議論している。

黄瀛は詩人としても知られていたが、日中関係の悪化によって止む無く、故郷の中国へ帰国する道を選んだ。この選択によって彼はその後、日本詩壇との連絡を絶っている。2005年、黄瀛は故郷の重慶で長寿を全うした。享年98。戦争の苦しみに翻弄された波乱万丈の人生を閉じた。

彼が亡くなった後、遺品の中から大量の詩文原稿が見つかった。詩の大半が日本語の完成された作品で、詩の内容は日本に対するいろいろな思いに溢れている。青少年時代を日本で過ごしたため、日本での生活は彼にとって生涯忘れられないものであったのであろう。

一体、彼はどのような詩を書いていたのだろうか。ここに、彼が19歳の時に書いた詩を読んでみる。詩のテーマは『七月の情熱』（「混血」）である。詩文は自分の心の底の感情を描いている。

白いパラソルのかけから
私は美しい神戸のアヒノコを見た
すっきりした姿で
何だか露にぬれた百合の花のやうに
涙ぐましい処女を見た
父が——
母が——
その中に生まれた美しいアヒノコの娘
そのアヒノコの美しさがかなしかった

ところで、黄瀛の父は当時、重慶師範学校校長を務めていた黄沢民で、黄寧馨という妹がいたが、生後間もなく亡くなっている。母は太田喜智（1887～1933）で、とても向上心に溢れた日本

1) 法政大学国際日本学研究所 教授

人であった。千葉県八日市場市の金物商店の長女として生まれた喜智は、近所では才女と呼ばれていたほどで、小学生時代には2回の飛び進級を果たし、18歳で女子師範学校を卒業している。

卒業後は優秀な教員として地元の小学校に勤務していたが、日露戦争(1904~1905年)の後、「日清交換教員」の募集を知り、周囲の反対を押し切って応募すると見事に合格、躊躇せず中国への赴任を決意。当時の日本では、女性が外国に赴任することに驚きを持って注目されていたが、さらに、彼女が中国に赴任してからの一大決心も人々を驚愕させるとともに、敬服の念を抱かせることになった。それが、黄沢民との国際結婚だったのである。

喜智は結婚後、日中文化などの融合に相当な力を入れた。夫婦の間でもお互いの文化を尊重する心を大事にし、息子黄瀛には儒教を重んじる夫の心を伝えつつ、中国人としての誇りを持つことを自覚させ、日本人としての美の意識を教えるなど、日中両国の文化を植えつけた。

黄瀛が8歳時、夫黄沢民が急死すると喜智は黄瀛と妹を連れて日本に帰国し、故郷の千葉県八日市場市に住みついた。黄瀛は地元の小学校に転入するが、この時母親の喜智は黄瀛を中国籍のまま入学させ、留学生という立場にあえて身を置かせている。日本人と同様の教育を受けた黄瀛は、常に成績はトップを維持し首席で卒業、公立の中学校に合格するも中国籍を理由に入学が認められなかった。

日露戦争以後、日本の中国への侵略が加速すると並行して中国人蔑視の風潮が日本中に広がり、黄瀛もその例外ではなく「混血の子」とのレッテルが張られ、少年の心にいわれなき差別の悲しみを味わったに違いない。

母子は止む無く東京千代田区の九段下に転居、黄瀛は私立の正則中学校に進学するが、言葉が不自由だった彼はこの頃から詩を書き始めている。きっかけは中国人への差別経験と、自分が日本と中国の混血児だという紛れもない事実を自覚したことによる。

九段下での母子三人の生活が始まってからも、喜智はいつも中国服を着て暮らしていた。自宅には中国人の留学生を受け入れていたが、ある日突然、警察が留学生たちに不法ともいえる捜査を行った。その時、彼女は留学生を守るために一所懸命に警察に抗ったという逸話がある。この時の行動から彼女の心の芯の強さを感じさせるとともに、息子黄瀛にとって母親の強さを知ることになり大きな影響を受けたことが推測される。

1923年、関東大震災が発生し、黄瀛の母子も被害を受けた。その後、東京を離れ、黄瀛は開校4年目の青島日本中学校に(1945年閉校)転校した。この頃になると黄瀛は詩を書くことに没頭し、毎日20本の詩が頭の中に浮かび、彼は書いた詩を積極的に投稿し続けた。その結果、雑誌『詩聖』(第一書房出版)に詩文が掲載され、同時に留学先の中国広州から投稿した草野心平の詩も掲載されたことで二人は知り合うことになり、その縁で文通が始まったという。二人はその後、生涯の親友となったのは言うまでもない。黄瀛は投稿の範囲を拡大させ、彼の詩は次から次へと『朝日新聞』の学芸版面に掲載されると、草野心平も黄瀛に負けまいと沢山の作品を発表している。このように、二人は互いに励ましあいながら詩を書き続けた。

1925年、黄瀛が詩人になるための大きなチャンスが訪れた。当時、詩の世界で最も代表的な月刊誌『日本詩人』2月号で詩文を募集、当選した詩が新しく出版される『新詩人集』に掲載されることが決まっていた。千家元麿や萩原朔太郎ら当時の詩壇を代表する10人が審査委員会に名を連ね、10篇の詩作品を選んだが、そこになんと黄瀛の詩『朝の展望』が第一席に選ばれ、雑誌の巻頭を飾ることになったのである。

あ々朝は実に気持ちがいい
窓をふいていると

暖かい風が入りこみ部屋をぐるぐるまはる
 そしてああ
 日曜の朝はいつにない日の流れ
 いつにない部屋の静けさ・・・・
 春のやうな気分もて
 ころしづかにも
 日曜の朝の展望をするのだ

これがきっかけとなって、黄瀛はめきめきと頭角を現し、日本の詩壇に認められるようになった。間もなく、萩原朔太郎が『日本詩人』へ寄稿し、黄瀛を激励する文章を掲載しているが、その内容を要約すると「黄君の感情は気分の軽さと明るさによるものであり、貴公子の風格を持っている。君はプラス面での健康気質を持っている。(中略)君は表現の面では素晴らしい才能を持っている。(中略)実は、君は音楽家のような鋭い耳を持っている」というものだった。そして同年の4月、草野は広州で雑誌『銅鑼』を創刊したが、その時、黄瀛は発起人5人の一人となっている。

黄瀛は青島中学校を卒業した後、再び東京に戻った。彼は日本に戻ることに二つの夢を持っていたのである。一つは詩人としての素養を蓄積させること、もう一つは東京帝国大学の入学であった。しかし、彼は進学するための勉強にはあまり集中できず、それよりも詩壇での交友関係の拡大に時間を費やしている。東京で草野心平の帰国を迎えると、初対面にもかかわらず二人は一緒に寄宿し始めた。その後、次第に友情関係が深まると同時に、黄瀛がずっと憧れていた高村光太郎との交流も始まっている。

結局、東京帝国大学の進学を断念した黄瀛は、1926年に御茶ノ水にある文学学院本科(大学部)に進学した。彼にとって2回目の留学生生活の始まりで、当時の講師陣には芥川龍之介、菊池寛、木下空太郎など、そうそうたるメンバーが名を連ねている。この学校は男女共学の学校で、自由思想の溢れる新制の大学であったが、なぜか黄瀛は1年で退学している。

おそらく、当時の社会情勢が中国人として黄瀛の魂を目覚めさせたことや、母親からの説得で詩人として生計を維持することの難しさを本人が自覚したことが大きかったのであろう。進路選択で悩みぬいた思案の末、中国軍人になる道を選んだが、最大の理由は中国人としての血が流れていることへの誇りと自覚、それが何よりも重要なことで祖国のために奉仕すべきと決断したのであろう。

中国軍人となることを決断したもう一つの動機に、再来日する前の1919年に勃発した五四運動ⁱが影響を与えたことも考えられる。勃発以後、中国国民たちの自己意識(個人意識)が高揚し始め、孫文の後継人となった蒋介石氏が中国の国民党軍を率いて、全国統一を目指して「北伐」戦争を踏み切ると、日本軍はこの行動を阻止するために、公然として山東省を占領した。黄瀛は蒋介石の軍事行動に賛同するが、母が日本人であるため、「自分の体の中には半分の日本人の血が流れている、もし、自分が軍人になると、ある意味では母親の祖国の兵と戦うようになってしまう」と大いに悩み、黄瀛にとっては苦渋な決断となったであろう。一方で、彼が軍隊に入隊することに反対する人も多かった。文化学院学鑑の与謝野晶子もその一人で、彼女はかつて「君死

i 五四運動：中国北京の学生が起こした反日示威運動とそれに続いて全国各地で展開された一連の愛国運動をいう。大衆運動の力によって北京政府にベルサイユ条約の調印を拒否させた中国近代史上の画期的な事件で、旧民主主義革命から新民主主義革命への転換点とされる。(記者注)

にたまふことなかれ」という有名な詩文を書いている。もしかすると、彼女はこの詩文のような気持ちで黄瀛の入隊に強く反対したのであろう。

その後、黄瀛は1927年に東京市ヶ谷にある陸軍士官学校に入学した。彼の学費は当時の中国政府からの公費、つまり国費留学生であった。卒業後、1930年に彼は通信用の鳩を所有する中野の通信部隊に所属するようになった。しかし、張作霖の暗殺事件（1928年）後の1931年に、彼は日本を離れて中国に戻り、国民党の部隊に入隊している。この時点で、詩人として生きる道を絶ったことは実にもったいないことではあるが、彼自らがその道を本業として歩むことを諦めたのだから致し方がない。

ただ、黄瀛は士官学校在学中から、日本語を駆使して詩を書いていた。その詩で日本詩の世界では寵児となってしまい、それゆえ彼は詩への思いをなかなか断ち切れずにいただろう。士官学校の在学期間中、彼は1930年に初めての詩集『景星』を自費出版した。この詩集は小さいサイズで、ポケットの大きさほどで、出版費用は友人から援助によるものであった。そのため100冊しか印刷していない。中国に戻った後の1934年、彼は二冊目となる詩集『瑞枝』を出版している。出版費用はやはり中国人の友人が援助したものであった。

1945年の終戦後、黄瀛は日本人帰還事業部署の担当の一員となった。その時、彼は南京で草野心平と再会したことをとても喜び、草野心平を収容所から解放させている。そのほか、李香蘭が日本人、山口淑子であることを証明し、彼女の死罪を免じて日本へ送還することを実現させた。黄瀛は日本人の帰還事業を進めていく中で多大の貢献をしたが、このことは世間にあまり知られていない。しかし、彼がそこまでしたことには訳があり、それは自分のもう一つの祖国のためであった。

その後の黄瀛は、かつての国民党の軍属であったことから共産党軍の捕虜となり、裁判の結果、重労働が課せられて入獄、約13年間という長い期間にわたって自由を奪われた、しかも、出所後わずか4年足らずで文化大革命が始まり、再び投獄されることになり、1966年から11年以上の間、牢獄生活を余儀なくされ、2回の投獄で最終的に20数年の長期にわたって自由を奪われ、牢獄生活を送っている。

文化大革命が終息してやっと自由の生活を手に入れたのは1976年のことで、まもなく四川外国語学院という外国語大学の教壇に立った。その年、彼は齢72歳、以後、黄瀛はずっと中国の若者に日本文学を80歳余りまで教え続けている。

二. 黄瀛・詩・日本語

黄瀛にとって日本で数多くの文人と友人になれたことは貴重な宝だったが、中でも宮沢賢治との出会いは彼にとって最も忘れられないことだった。

宮沢賢治は、1924年に自費で東京関根書店から詩集『春と阿修羅』を出版しているが、草野心平が自分と同じように宮沢賢治が高村光太郎を敬慕していることで、1925年に同人雑誌『銅鑼』を立ち上げた時に宮沢賢治を誘っている。誘いを受けて同年9月の第4回発行の時から同人の活動に正式に参加したが、創刊時から参加していた黄瀛は、宮沢賢治の詩に魅了され、直接会いに行く決心をし、宮沢賢治が住む岩手県の花巻市をわざわざ訪ねた。黄瀛が陸軍士官学校を卒業した1929年のことで、彼の部隊がちょうど花巻温泉で休憩している間、夜の時間を利用して宮沢賢治を訪れたのである。初対面では、賢治が病気で寝たきり状態だったため、長話はできなかったものの1時間ほどは話し込んでいる。

黄瀛は、1896年生まれ宮沢賢治より10歳若く、まだ地方の無名詩人の一人にすぎなかった賢

治より、当時の詩壇ではすでに相当の知名度があった。それでも、黄瀛が賢治の才能に惚れ、わざわざ賢治を訪ねた理由を直接、筆者は聞いている。筆者は黄瀛先生の四川外国語学院時代の教え子で、かつて黄瀛先生から賢治に対する印象を「賢治は美男子とは言えないですが、彼の詩がかえって美しいのだ。彼の詩を読むとすぐ分かることだ」と。

終戦後、黄瀛は日本に帰れなかったが、当時すでに彼は死んだのではないかと思っていた日本の友人たちは、彼が刑務所から釈放されてまだ生きているということが分かった時に非常に喜び、1982年に蒼土社で黄瀛の第二詩集『瑞枝』の復刻版を出版した。その中に黄瀛は「日本語で詩を書く時（略）、詩がずっと私の旅友だ、（略）私にとって詩があるからこそ現在まで生き続けられた」との一文を寄せている。確かに、詩を書くことが黄瀛の人生の原点だと言える。

筆者は以前、黄瀛夫人から黄瀛のスーツケースを見せてもらったことがある。その中には日本へ行くための着替え、背広、書籍などがいっぱい詰め込まれていた。夫人の話によると、彼はいつも自ら荷物をまとめ、奥さんの手伝いも不要だったそうで、彼は準備万端いつでも日本へ出発ができる態勢を整えていたという。1984年、1991年、1996年そして2000年、黄瀛はこのスーツケースを持って日本に来ている。母親が生まれ育った故郷へのノスタルジアが黄瀛の詩の魂を支えてきたからだ。

2005年、黄瀛はこの世を去った。9月24日、雨の中で四川外国語学院日本語学科の建物の前の空き地では、黄瀛詩碑の安置式が行われた。詩碑には黄瀛の詩が篆刻されているが、その詩文は彼の第一詩集『景星』の中から選んだ一篇の短詩『ある夜』である。

「ある夜」

空だけが美しい反射だ
道は霜どけた砂利道だ
犬の遠吠えに立ち止まるな！
竹藪の上に『三つの星』が点 点 点

中国人が書いた日本語の詩碑を設置するのは、中国では初めてのことである。話によると、黄瀛は亡くなる直前、口の中では家族たちが誰も分からない日本語で何かを呟いたという。そして彼の書斎から出てきた日本語で書いた多くの詩文、さらには母親の写真をずっと飾っていたことなどを思い合わせると、黄瀛は生涯かけて日本語で詩を書き続ける「異邦」の一詩人であったことが伺える。今でも、日本詩壇を離れなければならなかった恩師の悲しく叫ぶ声が私の耳に響いている。

注

〈付 記〉

翻訳した部分は王敏主編『詩人黄瀛』（『詩人黄瀛』重慶出版集団・重慶出版社 2010年）下編黄瀛研究 第一章 面临近代教育转型期的黄瀛母子、三、黄瀛母子的事例（262-269頁）の部分である。

これ以外の部分は既に王敏編『日本文化の交差点』（三和書籍 2008年）の中で翻訳されている（王敏「総論 比較を伴った文化交流—戦前の日本教習と日本留学を中心に—」（3-38頁））。

〈解題〉

ここに訳出された鈴木晶准教授の文章は、王敏教授（法政大学国際日本学研究所）によって編纂された『詩人黄瀛』（重慶出版社 2010年）のなかの論文の一部で、黄瀛とその母親に関する部分の日本語訳である。

黄瀛（1906-2005）は、日本人の母（太田喜智）と中国人の父（黄澤民）との間に生まれ、戦前・戦後を通じて日本語で現代詩を書き続けた。まさに現代史のなかの日中文化交流を象徴する人物である。彼は本学の創立者佐藤義詮氏とは戦前東京の御茶ノ水にあった当時ユニークな学園「文化学院」の同窓であった。わずか一年の付き合いではあったが、同学園の他の卒業生がそうであったように、交友は生涯つづいた。というのも、黄瀛が戦後の長い幽閉生活ののち、中国四川の重慶にある四川外語学院に日本語教師として迎えられた後、両者は連絡をとりあい、そして黄瀛が何十年ぶりかで来日した折、彼は別府大学の佐藤義詮氏を訪ねている（〈追記〉参照）。そのこともあって、四川外語学院は一時本学の姉妹校になった。

黄瀛の生涯は数奇に満ちており、とてもここで述べられるようなものではない。幸い、今年（2016年）ようやく黄瀛に関するまとまった評伝が出版された。佐藤竜一氏の『宮沢賢治の詩友・黄瀛の生涯—日本と中国二つの祖国を生きて』（コールサック社）である。ただ黄瀛の中国での二度にわたる長期の幽閉生活についてはほとんど触れられておらず、今後の研究にまたなければならぬ。しかし、この本によって黄瀛の名は今後知られるようになるだろう。黄瀛は実は生前の宮沢賢治と会った数少ない同時代の詩人である。また本学の大学歌の作詞者でもある詩人草野心平とは早くから詩友であった。その意味で彼はもっと注目されてよいだろう。そしてそのような人物と本学の佐藤義詮氏が生涯の友であったということも知られてよいと思う。

ここに紹介するのは黄瀛本人の書いたものではないが、四川外語学院で彼の教え子であった王敏教授が執筆された黄瀛研究の中国語論文の一部を鈴木晶准教授が日本語訳したものである。鈴木晶准教授が王敏教授に連絡を取り、今回同教授のご好意により、翻訳が実現することとなった。内容は黄瀛の母（太田喜智）が清国の「お雇い日本人」（日本教習）であったので、その母親と黄瀛の日中文化交流に関するものである。今後日本における黄瀛研究の一助となるものと思われる。

山本晴樹（別府大学文学部史学・文化財学科）

〈翻訳の背景及び謝辞〉

今回の詩人黄瀛に関する翻訳の件は、山本晴樹先生からのお誘いから始まったものです。本格的に翻訳に入る前に、私は詩人黄瀛に関しては全く知りませんでした。原文を的確に翻訳するために、事前に詩人黄瀛について研究し始めたのですが、そのうちに近代日中両国において、偉大な詩人黄瀛の存在感をじわじわ感じたものです。

詩人黄瀛が日本の文学界の宮沢賢治、萩原朔太郎、与謝野晶子、草野心平と親交があり、さらに中国近代文学の巨匠である魯迅との親交があったことには、正直に言うと驚きました。

近代史に、日中両国の文学交流分野では、母語でない日本語で詩を発表し、さらに日本詩界で高い評価を受けたのは黄瀛だけです。

偉大な詩人黄瀛は本当に中国と日本のかけ橋でした。日本と中国の文化を勉強及び研究する人たちが、黄瀛のことを知らないといけないと実感し、彼が偉大な存在であることが分かりました。

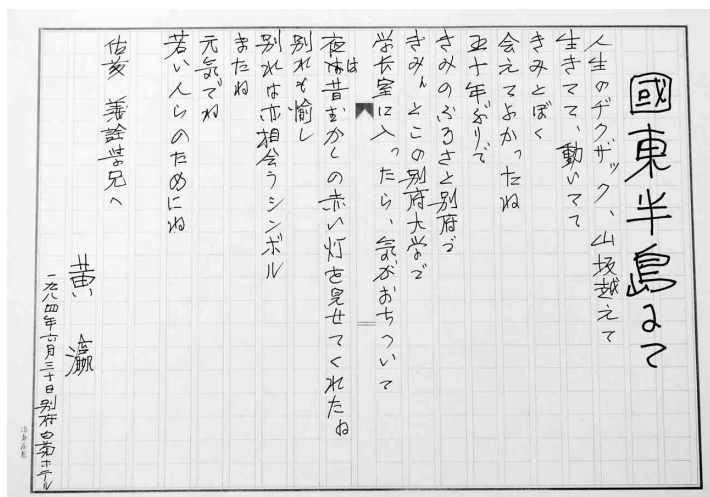
今回の翻訳により今後日本と中国両国間では、詩人黄瀛のことをもっと広く知っていただければ幸いと思っています。

今回の翻訳にあたって、詩人黄瀛に関する文献資料の収集に関しては、法政大学教授王敏先生から貴重なご助言・ご教示を賜り、本当に感謝します。さらに、本学文学部の山本晴樹教授から資料収集などご協力をいただき、今回の翻訳が完成まで順調に進みました。心から感謝します。

鈴木 晶（別府大学文学部国際言語・文化学科）

〈追 記〉

佐藤義詮氏が学長室に掛けていた黄瀛直筆の詩「国東半島にて」の額



国東半島にて

人生ヂクザック、山坂越えて
生きてて、動いてて
きみとぼく
会えてよかったね
五十年ぶりで
きみのふるさと別府で
きみとこの別府大学で
学長室に入ったら、気がおちついて
夜は昔むかしの赤い灯を見せてくれたね
別れも愉し
別れは亦相会うシンボル
またね
元気だね
若い人らのためにね

佐藤 義詮学兄へ

黄瀛

1984年6月30日 別府白菊ホテル